2010/11/30 ムニ教授とプラチャンダ議長
2010/11/28 ロイ，事情聴取へ
2010/11/27 プラチャンダの平和，なるか？
2010/11/23 国家より党優先のマオイスト
2010/11/22 陸自隊員UNMIN派遣，４ヶ月延長
2010/11/16 また憲法改正
2010/11/15 首相選挙のドタバタ
2010/11/14 ロイ，反国家扇動罪で告発される
2010/11/13 キランvsプラチャンダvsバタライ
2010/11/12 毛沢東主義vsキリスト教vsヒンズー教
2010/11/11 印中代理戦争の様相
2010/11/07 ロイ： カシミールの不都合な真実
2010/11/06 労農党は大統領統治
2010/11/05 ガバナンス崩壊: ネパールと日本
2010/11/04 首相選挙，16回目も失敗: 大統領委任独裁へ？
2010/11/03 枯松神社： 神仏共生はなお可能か？
2010/11/02 Wordpressブログを使用してみて
2010/11/01 首相選挙，15回目も失敗

ムニ教授とプラチャンダ議長

ネパール研究会

印ネパール学の権威ムニ教授が訪ネし，プラチャンダ議長と会見した。各紙報道によれば，プラチャンダ議長は，インドをネパール人民の敵としているわけではないが，マオイストの政権復帰を妨害しているのはインドだ，と釘を刺したという。さすがプラチャンダ議長，そつのない対応だ。

一方，ムニ教授については，そのネパール論をいくつか読んだことはあるが，まったく記憶に残っていない。各紙が伝える彼の発言も，ほとんど無意味だ。なぜ各紙がこんな報道をするのだろうか？

それとも，ムニ教授には隠された使命があるのかもしれない。各紙報道からは，それはまったく読み取れないが。

谷川昌幸

投稿者: Tanigawa
2010/11/30 20:56

カテゴリー: インド, マオイスト, 外交
タグ: プラチャンダ, マオイスト, Muni

ロイ，事情聴取へ

デリー裁判所は11月28日，ロイらに対する刑事告発手続きを進め，それに基づきデリー警察が2011年1月5日に事情聴取，6日に捜査報告書を提出することになった。
（参照）ロイ，反国家扇動罪で告発される

告発者によれば，ロイは10月21日デリー開催セミナー「自由（解放）――唯一の道(Azadi-The Only Way)」において，反インド演説を行った。「被告発者らは，人々の間に反インド政府感情を植え付け，政府とその武装諸組織を否定し，実力によりインド政府を破壊しようとしてきた。」これは反政府扇動罪に当たるというのだ。(Hindustan Times, Nov.27)

この反政府扇動罪は重罪で，終身刑まである。記事によれば，こうした政治がらみの事件の場合，政府は起訴しないことが多いというが，どうなるか予断は許さない。

ところで，印マオイストについては，ネパール・マオイストとの関係が指摘されるようになり，ロイの記事もネパール・メディアに出始めた。

11月27日に終了したマオイスト第6回拡大中央委員会集会（パルンタール）で採択された「12項目暫定運動方針」でも，印マオイスト指導者Ajadの虐殺を激しく避難している。

むろん，この「12項目暫定運動方針」では，ラシュカエ・タイバ(Lashkar-e-Taiba)との関係や印マオイスト軍事訓練は，ためにする悪意のデマ攻撃だとして全面的に否定している。

しかし，ラシュカエ・タイバはさておき，印マオイストとは，本来「同志」であり，協力関係がない方が不自然だ。もしインドとネパールのマオイスト連帯が強化され，それに中国が加担することになれば，これはやっかいなことになる。

もしそうなったとき，われらがロイはどうするのだろう。ネパール・マオイストの戦列に加わるのだろうか？

谷川昌幸(C)

投稿者: Tanigawa
2010/11/28 18:19

カテゴリー: インド, マオイスト, 中国
タグ: Azadi, Lashkar-e-Taiba, Roy, sedition

プラチャンダの平和，なるか？

マオイスト拡大中央委員会(Plenum)は，今日27日閉会する。プラチャンダ議長の最終運動提案はまだ公表されていないが，2011年5月28日までに「人民連邦民主共和国憲法」が制定できなければ，人民蜂起による権力奪取を目指すというものになるようだ。

マオバディ・プレナム

ネパールは，６月３０日のマダブクマール・ネパール首相の辞任表明以来，暫定政府の統治を続け，首相選挙は16回に及んでいるが，憲法起草実務は着々と進んでおり，原則さえ決定すれば，それに応じた条文を備えた新憲法がただちに公布施行できるはずである。ネパールの法実務家の能力はたいしたものだ。

しかし，肝心の憲法の原理原則が定まらない。この調子で首相選出ができず，2011年1月15日UNMIN撤退となれば，バイダ副議長の人民蜂起の目が出てくる。プラチャンダ議長もその可能性を認め，保険を掛けているので，人民戦争再開となるかもしれない。

もし人民戦争再開となれば，今度は，インドがもっと本格的に介入し，それに対抗して中国も北方からの進出（侵出）を図るだろう。大変なことになる。

プラチャンダ議長は，「人民民主主義憲法」を要求している。十分に過激な主張であり，NCやUMLに呑めるとは思えない。インドも認めない。難しい事態になるかもしれない。

谷川昌幸（C)

投稿者: Tanigawa
2010/11/27 19:18

カテゴリー: マオイスト, 民主主義, 人民戦争
タグ: インド, プラチャンダ, 中国, 人民民主主義

国家より党優先のマオイスト

マオイスト第6回拡大中央委員会(Plenum)が11月21日，ゴルカのパルンタールではじまった。25日までの予定。

ゴルカ郡パルンタール付近

このプレナムには，全国から６千人が参加，その中にはカントンメント収容の人民解放軍戦闘員１４００人も含まれている。あれあれ，これは「包括和平協定」「武器・軍管理監視協定」違反ではないかな？

２２日には，バイダ副議長とバタライ副議長が運動方針案を読み上げた。各２時間。バイダ副議長は，人民蜂起で人民民主主義(人民独裁)を実現せよ，と檄を飛ばしたらしい。これに対し，バタライ副議長は，いやいやそれはまずい，まずマオイスト主導で新憲法を制定し平和を実現する努力を尽くすべきだ，もしそれが妨害され新憲法制定が困難になったら，そのとき人民蜂起に訴えるべきだ，と提案したという。

この左右両論を踏まえ，２３日午前，プラチャンダ議長が，まあまあ，なあなあの折衷案を出し，ケンケンガクガクの議論を通して弁証法的統一を図る予定とのこと。唯物論的弁証法よりも，やはり本家ヘーゲルの精神的弁証法の方がマオイスト好みらしい。

これはマオイストの大会だから，それはそれでよいが，この拡大中央委員会のおかげで，世界新記録を更新中の首相選挙が棚上げとなり，MK・ネパール暫定首相は「世界虎保護会議」のためロシアに行ってしまった。次の第１７回首相選挙は，１２月１６日(木)の予定。われらがポウデルNC議員団長は，もちろん立候補を継続する。えらい。

ここネパールでは，国家と党の関係はすでに逆転，党の方が国家に優先する。マオイストが政権を取れば，すんなり党主導人民民主主義国に移行できるわけだ。未来は輝かしい。

で，目を未来から足元に転じパンタールを見ると，ここは２０年ほど前いったことがあり，美しいところなのだが，なんと，プレナム参加者の６分の１，1000人余が食中毒で倒れてしまった。飲料水か食事が原因らしい。未来は輝かしい。が，足元はおぼつかない。

谷川昌幸(C)

投稿者: Tanigawa
2010/11/23 19:49

カテゴリー: マオイスト, 政党
タグ: ゴルカ, プラチャンダ, 人民独裁

陸自隊員UNMIN派遣，４ヶ月延長

日本政府は11月16日，「ネパール国際平和協力隊」（陸自隊員UNMIN派遣）を４ヶ月延長

し，2011年3月31日までとした。

ネパール派遣陸自隊員は，日本政府が直接指揮しているわけではない。陸自隊員は，「中央即応集団（CRF)」司令部所属とされ，そこから「個人として」UNMINに派遣され，UNMIN指揮下で停戦監視活動に当たっているのだ。

この「中央即応集団」は2007年3月28日に編成され，国内の緊急事態（テロなど）への対処と，国際平和協力活動を主な任務としている。これは軍と民の間の灰色部分，自衛隊にとっては未開拓の広大な中間地帯である。防衛省はここに目をつけ，軍民協力を促進し，自衛隊の国内外での活動を急拡大させるための尖兵として，中央即応集団を設置したのである。

その自衛隊にとって，陸自隊員UNMIN派遣は絶好のチャンスであった。中央即応集団の編成が2007年3月28日（朝霞駐屯地発足3月31日），陸自隊員（中央即応集団司令部所属）のネパールへ向けての出発が3月30日。ネパール国際平和協力隊は，中央即応集団発足の祝砲，その尖兵といってよいであろう。

しかも，防衛庁は2006年12月の「省」昇格関連法の成立により「省」に昇格し，それと同時に，念願の自衛隊海外活動も晴れて「本来業務」となった。その防衛省にとって，自衛隊の「本来業務」としての初の海外活動が，このネパール国際平和協力隊だったのである。

ネパールは日本では絶大な人気があり，そこでの停戦監視活動にも危険はほとんど無い。ヒマラヤも象も寺院も，素朴な村や子供も，全部「本来業務」としての海外活動の宣伝に使い放題。日本政府が，当事国のネパールや国連以上に陸自隊員のネパール派遣（派兵）に積極的なのは，そのためであろう。前のめり，イケイケドンドンなのだ。

(防衛省幕僚監部HP)

周知のように，ネパールは印中両大国にもまれ外交上手，国連に平和構築支援を要請しつつ，国連が受諾して本格介入し，大金も投入し，引くに引けない状態になると，掌を返したように国連の「無能」を非難し，ちゃんとやれないなら「出ていけ」とさえ要求し，国連とギリギリの取引をしている。実にしたたか，たいしたものだ。

これに対し，国連も，UNMIN派遣期間の延長を当初の1年から，半年ごと，4ヶ月ごとに設定し，それをカードに，ちゃんとやらないなら本当に引き上げるぞ，と脅し，ネパール側の平和努力を要求している。国連もネパール側とギリギリの外交交渉をしているのだ。

国連の次のUNMIN派遣期限は，2011年1月15日まで。これ以上の延長はしない，と国連は宣言している。ネパール側に突きつけた最後通牒なのだ。（実際には，何らかの形で延長される可能性はある。）

これに対し，不思議なのが日本の陸自UNMIN派遣の期間延長。日本の「ネパール国際平和協力隊」派遣(日本出発)は3月30日，UNMIN発足の2ヶ月半後であったため，派遣期間設定がその分ずれることはあり得るが，３年も経過し，国連が「延長」カードを使うため延長期間を４ヶ月ごとに設定し始めても，日本政府はなぜかそれに合わせることをせず，国連の期間延長の先回りをし，UNMIN派遣期限よりも数ヶ月先を陸自派遣の期限に設定してきた。

2010年１月UNMIN期限５月15日まで延長に対し，３月陸自派遣７月31日まで延長。５月UNMIN９月15日まで延長に対し，7月陸自派遣11月30日まで延長。9月UNMIN2011年1月15日まで延長（最後）に対し，11月陸自派遣2011年3月31日まで延長。

陸自派遣期間は，発足時を除き，つねにUNMIN派遣期間より２ヶ月半先までとなっている。発足が2ヶ月半遅れたの

と，期間設定の技術的な問題もあるのだろうが，３年以上もたっているのであり，調整ができないはずはない。

日本政府が，つねに国連の先回りをし，陸自派遣期間を延長してしまえば，日本政府は「延長」カードを使用できないし，国連の「延長」カードの効果も殺いでしまう。日本政府は，２大国中国とインドの間に陸自隊員を派遣している，つまり派兵しているのだ。見方によれば，これはかなり大胆な，危険な政策だ。一刻も早く任務を完了し撤退，つまり撤兵するということは考えていないのであろうか。

ネパール陸自隊員派遣は実際には派兵であり，憲法上許されるはずもないが，それをひとまず棚上げしても，なぜ日本政府が国連の先回りをして派遣期間を延長しなければならないのか，なぜそんなに前のめりにならなければならないのか，どう考えても合点がいかない。やはり，「ネパール国際平和協力隊」を自衛隊海外活動の尖兵として利用することが最大の目的となっているのではないだろうか？

谷川昌幸(C)

投稿者: Tanigawa
2010/11/22 10:17

カテゴリー: 外交, 平和
タグ: UNMIN, 平和構築, 中央即応集団

また憲法改正

マオイスト，コングレス，統一共産党の三大政党は，憲法を改正し，暫定内閣でも正式予算を組むことができるようにすることに合意した。このお手盛り改憲により，予算案は１１月１９，２０日には提出できるそうだ。

しかし，予算といえば，国家統治の根本。それを三党の都合で簡単に変えてしまう。これは立憲主義でも法治主義でもない。これでは，いくら立派な憲法があっても，屁の突っ張りにもならない。

予算が通れば，MK・ネパール首相は当分政権を維持できるだろうし，議員諸氏やカントンメントの人民解放軍諸氏の生活も安泰だ。めでたい。

■１１月１６日談合参加の三党幹部
プラチャンダ(マオイスト議長)
バブラム・バタライ(マオイスト副議長，前財務大臣)
JN・カナル（UML議長)
BM・アディカリ（UML)
ラムチャンドラ・ポウデル（NC議員会長)
S・マハト（NC)
ネムワン（制憲議会＝立法議会議長）

■ネパール暫定憲法2007
第96条A(1)［予算案が提出できないときは］財務大臣は現行年度支出の１／３以内の額を次年度に支出するための法案を立法議会に提出することができる。

谷川昌幸(C)

投稿者: Tanigawa
2010/11/16 23:02

カテゴリー: 憲法, 政党
タグ: 立憲主義, 憲法改正, 法治主義, 予算

首相選挙のドタバタ

第17回首相選挙は，もともと17日(水)の予定だったのに，なぜか今日15日(月)に前倒しされ，ところが，にもかかわらず15日は中止となり，18日(木)に延期となった。猫も目を剥くドタバタ。

立候補者はラムチャンドラ・ポウデルNC議員会長のみ。すでに16回も立候補したのでハクがつき，最高裁もポウデル候補でよいのではないかと示唆した。むろん司法部がこんなことを言うのはどうかと思うが，最高裁がそういいたくなる気持ちは分からないではない。

この最高裁発言を受け，コングレスは制憲議会ネムワン議長に対し，立候補はポウデル氏だけだからポウデル候補を首相と宣言すべきだ，と要求した。他党はもちろんこれに猛反対。司法部も巻き込み，ドタバタ，バタバタ，いよいよ混沌としてきた。

この調子では18日の第17回首相選挙も失敗しそうだ。やはり，これはどう見ても立候補者を出さないマオイストと統一共産党が悪い。わが敬愛する保守主義によれば，時間が正統性を生み出す。とすれば，他のどの理屈でもなく，16回も正々堂々と立候補したその事実だけで，ポウデル氏には他の誰よりも大きな首相候補者としての正統性が認められるようになるかもしれない。

司法部の最高裁が口を出すのはいただけないが，ポウデル氏が16回も立候補したということは歴然たる事実であり，こ

れをこれから否定するのは，他党にはかなり勇気のいることであろう。

谷川昌幸(C)

投稿者: Tanigawa
2010/11/15 22:48

カテゴリー: 議会, 政党
タグ: マオイスト, 首相選挙, NC, Poudel, UML, 保守主義

ロイ，反国家扇動罪で告発される

ニューデリーの裁判所が，アルンダティ・ロイに対する反インド扇動罪容疑での告発を受理した(Outlook India, Nov.10)。

ロイは，ニューデリーで開催された集会「Azadi-The Only Way（自由――唯一の道）」に参加し，そこで「カシミールはインド固有の領土ではなかった。これは歴史的事実。インド政府ですら，それを認めていた」といった趣旨の発言をした。

告発者たちは，このロイ発言がインド刑法(IPC)124A,153A,153B,500にあたるとして，FIR(First Information Report)により告発していたのだ。

Outlook India, Nov.10

ロイのこのカシミール自決支持発言は，マオイスト擁護発言以上に深刻な問題に発展する可能性がある。もし日本で，たとえば沖縄は日本固有の領土ではない，といった発言をすればどうなるか？ 沖縄は沖縄住民のものであって日本のものではないことは自明のことだが，そんな正論は日本ナショナリズム・日本民族主義からの総攻撃をうけ，生命さえ危険になるかもしれない。ロイのカシミール自決支持は，それほど危険な勇気ある発言なのだ。

このカシミール自決支持発言もそうだが，ロイはつねに原理的な根源的問題と関連づけながら目の前の具体的な問題について発言している。彼女の発言が単なる時局的政論にとどまらない鋭さと重さをもつのはそのためである。

ネパールにも，民族自決など，過激な議論は少なくないが，その多くはロイのような具体的でかつ原理的な突き詰めた議論とはなっていない。大部分は，残念ながら，流行を追うだけの外見的原理主義にとどまっているといわざるをえない。

■Indian Penal Code
Section 124A. Sedition
Whoever,by words,either spoken or written,or by signs,or by visible representation,or otherwise,brings or attempts to bring into hatred or contempt,or excites or attempts to excite disaffection towards.[* * *] the Government established by law in [India],[* * *] shall be punished with [imprisonment for life],to which fine may be added,or with imprisonment which may extend to three years,to which fine may be added,or with fine.
Section 153A.
Promoting enmity between different groups on grounds of religion,race,place of birth,residence,language,etc.,and doing acts prejudicial to maintenance of harmony……
Shall be punished with imprisonment which may extend to three years,or with fine,or with both.

谷川昌幸(C)

投稿者: Tanigawa
2010/11/14 23:57

カテゴリー: インド, マオイスト, 民族
タグ: カシミール, Roy, 民族自決

キランｖｓプラチャンダｖｓバタライ

マオイストは、11月21日からゴルカのパルンタールで第6回拡大党大会を開催する。その党大会

には、プラチャンダ議長、キラン副議長、バブラム・バタライ副議長の３指導者が、それぞれ運動方針案を提出する。ところが、党大会以前にこれが党外に漏れ、各紙が取り上げ、けんけんがくがくの議論を始めた。機密じゃじゃ漏れ。ネパール・マオイストも民主的になったものだ。

１．キラン副議長
左翼過激派は、キラン（モハン・バイダ）副議長。彼によれば、主敵の米帝は今やふらふら、世界革命の客観条件は熟しつつある。ネパール人民にとっては「インド膨張主義」と「ネパール反動勢力」が当面の敵であり、これらをまず殲滅しなければならない。

したがって、マオイストが「人民政府」を解散し、「人民戦争」終結宣言を出したのは、誤りであった。今後は革命的諸勢力の人民統一戦線を強化し、人民蜂起・人民戦争による「人民連邦共和国」の建設を党の運動方針とすべきである。

ところが、プラチャンダ議長は、人民蜂起・人民戦争を棚上げし、右派機会主義者に屈服している。彼は修正主義に傾いている。

２．バブラム・バタライ副議長
バタライ副議長によれば、革命は街頭運動・制憲議会・政府機関の３つを、この順で優先順位を付けつつ、利用すべきであるにもかかわらず、プラチャンダ議長はこれを理解せず、そのため党活動が混乱し革命は前進していない。街頭運動で圧力をかけ、政府機関に浸透しつつ、運動を進めていくべきだ。

また、革命戦略と行動計画は、内外の権力バランスを考慮して作成されなければならない。ネパール人民の敵は、「インド膨張主義者に支援された国内反動勢力」である。バイダ副議長のように「国内反動勢力」と「インド膨張主義者」を丸ごとネパール人民の敵とするのは誤り。「インド膨張主義者」がネパールを直接攻撃しているわけではない。

また、プラチャンダ議長のように王党派との協力を考えるのは、マオイストの立場を害するものであり、誤りである。

３．プラチャンダ議長
プラチャンダ議長によると、ネパールは、革命と独立を目指す勢力と、それらに背を向け「外国反動勢力に屈服する勢力」とに二極分化しつつある。

問題は、党幹部たちの対立。リーダーたちに規律がなく、派閥抗争、分派の動きがあり、運動目標の実現を妨げている。

革命運動は、内外の情勢を見てバランスを取ることが必要だ。街頭運動・制憲議会・政府機関の３戦線作戦は誤り。議会と政府機関を通して運動を進め、進歩的憲法を制定することを目指すべきだ。

４．三極構造の妙
三極構造はもっとも明快な安定した権力構造であり、マオイスト党内が三極構造に落ち着くのは、ごく自然な成り行きである。

急進派のキラン副議長と穏健派のバタライ副議長の二極を、プラチャンダ議長がどうまとめるか？ プラチャンダ議長とは話したことはないが、近くで見ただけでもカリスマ性を感じさせる指導者だ。しかも、天性のネアカ。急進派を牽制しつつ、平和構築を進めて行くには欠かせない人物だ。

マオイストが分裂し、収拾のつかない内戦が始まると、たいへんだ。ここはネアカのプラチャンダ議長の政治的手腕に期待したい。

* “Maoist top guns agenda for plenum,” Himalayan News Service, Nov. 12.

谷川昌幸(C)

投稿者: Tanigawa
2010/11/13 18:14

カテゴリー: マオイスト, 政党, 人民戦争
タグ: Bhattarai, Kiran, Prachanda, 人民戦争, 人民民主主義

毛沢東主義ｖｓキリスト教ｖｓヒンズー教

[1]

ネパールの混乱は、深層では、むしろ宗教にある。11日のekantipurをみると、マオイストのプラチャンダ(ダハール)議長がナクサライト(印マオイスト)のネパールでの訓練を必死になって否定している、そのすぐ横に、キリスト教会が黄金色の宣伝を出している。この場所は、アメリカ国務省の定位置だが、そこに今度は米系キリスト教会の宣伝がでているのだ。(記事連動広告であろう。)

[2]

たしかに近代民主主義は近代キリスト教(プロテスタント)によって生み出されたものであり、相補関係にあることは事実である。その意味では、アメリカ国務省とキリスト教会が交代で前近代的偶像崇拝や非民主的政治を批判し、“無知蒙昧なネパール人たち”を啓蒙し彼らの神に目を向けさせようとするのは、きわめて合理的なことであり、当然といってよいかもしれない。

しかし、こんな無神経なことをもし日本でやったら、余計なお世話だ、Yankee, Go Home! となることは、まず間違いない。だから、もちろんアメリカもそんな馬鹿なことはしない。にもかかわらず、ネパールでは堂々とやっている。ネパールは馬鹿にされているのだ。

[3]

ekantipurの画面を見ていただきたい。「宗教はアヘン」と信じるマルクス主義者、「革命は銃口から」と唱える毛沢東主義者の右横で、Global Media Outreach というキリスト教団体が、「神を信じるものは救われる」と説教している。クリックしてみると、本部はアメリカ。こんな取り合わせは、日本なら喜劇だが、ネパールでは悲劇。悲愴感がつきまとう。それだけ、ネパール社会の亀裂は深いのだ。

いまの日本社会であれば、キリスト教会が「信じるものは救われる」と宣伝しても、大多数の日本人は「あっ、そう、それはすばらしいですね」で済ませてしまう。ところが、ヒンズー教が生活となっているネパールでは、そうではない。

[4]

そもそもヒンズー教とキリスト教は、歴史的に不幸な関係にあった。ヒンズー教は、イエス=キリストを神々の一人として受け入れようとしたが、キリスト教はヒンズーの神々を猥雑な偶像として唾棄し、ヒンズー教徒を改宗させ、彼らの神の絶対的支配の下に服従させようとした。しかも、キリスト教は経済的にも政治的にも圧倒的優位にある欧米諸国をバックにしている。キリスト教会には、金力と権力の後光が輝いていた。

ヒンズー教徒は、教徒として生まれるのであり、ヒンズー教に改宗の思想はない。これに対し、キリスト教、特にプロテスタントは、一切の伝統や慣習を否定し、絶対的な唯一の神への全面的改宗を迫る。他者、他宗教を無限に受容しようとするヒンズー教と、自己以外の他者を絶対的に拒否するキリスト教。こんな両極端の宗教が、いまネパールでは真正面から激突し始めているのである。

[5]

欧米や日本は、このような原理的対立の時代をすでに経てきており、一歩引いてみるだけの余裕がある。先進諸国のスレた現代人には、そのような原理的対立は、むしろ喜劇に見えてしまう。「 金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」（マタイ福音書19・24）。「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである」（同5・3）。

ところが、ネパールではそうではない。マオイストは唯物論に立ち「宗教はアヘン」と信じ、「銃口から革命」を生み出そうとしている。その一方、大多数のヒンズー教徒は無数の神々を日々礼拝し、神々と共に生活している。その基本的事実を無視し、そんな初歩的なことも考慮せず、アメリカ国務省やキリスト教会は、無邪気に、一方的な原理主義的宣伝を垂れ流している。国務省もキリスト教会も、ネパールは彼らよりもはるかに長く深く重い文化の豊かな伝統を持っている、という事実を見るべきであろう。

[6]

日本でなら、もちろんかまわない。喜劇として、笑い飛ばされるだけだから。たとえば、はるばる欧米から和歌山県大地町に押しかけたシーシェパードのイルカ原理主義者たちに対しては、高々と聖書を掲げ、語りかけよう！

「神は彼ら(人間)を祝福して言われた。産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」(創世記1・28）

「地のすべての獣、空のすべての鳥、地に這うすべてのもの、海のすべての魚は恐れおののいて、あなたがたの支配に服し、すべて生きて動くものはあなたがたの食物となるであろう。さきに青草をあなたがたに与えたように、わたしは

これらのものを皆あなたがたに与える。」(創世記9・2-3)

みよ、神は「すべて生きて動くもの」を人間の「食物」として与えられた。クジラもイルカも、神が人間に与えられた「食物」である。これは全能の神の命令である。シーシェパードごときに、この神の命令を改変する力はない。大地に来るなら、キリスト教の神を殺してから来るべきだ。ニーチェなら、そうしたであろう。

日本の仏教徒や無神論者には、聖書を使ってイルカ原理主義を笑殺するだけの余裕がある。創世記の一節を看板やチラシに書き、イルカ原理主義者に見せてやるだけのカネもある。

しかし、われわれ日本人は、牛を神聖視する人々に向かって、「牛の偶像崇拝をやめよ」「神は牛を人間の食物とされた、牛を食え」とは、決していわない。日本人はその程度のたしなみは心得ているのだ。アメリカやキリスト教会にも、無神経によその国に手を突っ込み、引っかき回すようなことはやめていただきたいものだ。

▼キリスト教とヒンズー教の関係については、小谷汪之「キリスト教とヒンドゥー教」（『インド社会、文化史論』明石書店、2010年）が、この上なく鋭く、明快に分析している。必読文献。

谷川昌幸(C)

投稿者: Tanigawa
2010/11/12 13:46

カテゴリー: マオイスト, 宗教, 文化
タグ: イルカ, キリスト教, ナクサライト, ヒンドゥー教, 神, 聖書, 原理主義, 国務省, 改宗

印中代理戦争の様相

ネパール研究会

ネパール議会は首相選出に16回も失敗、次の17回目（11月17日）も絶望的だ。大混乱というよりは、機能停止というべきだろう。どうして、こんなことになったのか？

ネパール地域社会はまだまだ健在であり、政治家たちもかなり有能だ。それにもかかわらず三大政党が角突き合わせ、妥協がならないのは、外部勢力の介入のせいと考えざるをえない。三大政党は、印中の代理戦争に引き込まれつつあるのだ。

[1]

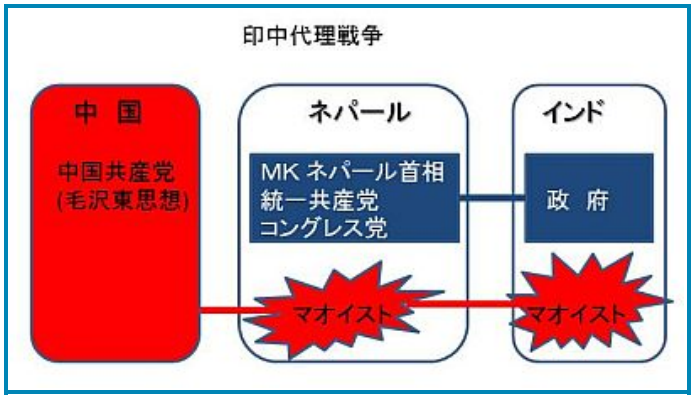
国王がいた頃は、国王が中国カードを使ってインドを牽制、微妙なバランスを維持しつつネパールの独立を維持してきた。国王は決して民主的でも人権尊重でもなかったが、ネパールでの猛虎と恐竜の跋扈は許さず、何とかネパールの独立を維持してきたのだ。人権と民主主義の観点からは、国王にはケシカラン点が少なくなかったが、それには国家独立維持の代償の側面があったことも事実だ。

[2]

ところが、ネパールの宗主国を自認するインドにとって、何かというと中国カードをちらつかせる国王は、目障りであった。インドは国王を排除し、ネパールをインド圏内に完全に取り込もうと企み、ネパール議会派諸政党やマオイスト(まだ反中国だった)の民主化運動を支援し、「12項目合意」をお膳立てし、ついに2006年4月、「民主化運動Ⅱ」により王政打倒に成功したのだ。インドは、このとき、目先の利益を追う余り、国王が中国進出に対する防波堤でもあったことを見落としていたのである。

インドが議会派7政党とマオイストを支援し、国王を追放したとたん、マオイストが先祖返りし、中国共産党に急接近、いまや中国の強力な支援をバックに、連日インド攻撃を繰り広げている。しかも、ネパール・マオイストは、インドマオイストへも接近しつつある。中国共産党＝ネパール毛沢東主義派＝インド毛沢東主義派の赤色共闘である。インド政府は当てが外れ、ほぞをかんでいるに違いない。

つまり、現在のネパール政治は、日に日に印中の代理戦争の様相を深め、ネパール人自身ではコントロールが困難になりつつあるのだ。



このように、いまのネパール政治の混乱の根本的要因の一つが印中介入であることは、明白である。王制の場合、取り巻きがいるにせよ、最終決定権限は国王一人にあり、権力関係ははっきりしていた。ところが、政党政治となると、政党対立もあれば党内派閥対立もあり、外国がつけ込むチャンスは無数にある。マオイストですら、プラチャンダ議長は中国派、バブラム・バッタライ副議長はインド派だ。ＭＫ・ネパール首相はもちろんインドに支援されている。

[3]

インドは、マオイスト闘争の拡大激化に危機感を募らせ、国内ばかりかネパールにおいてもマオイスト運動を弾圧しようとしている。議会第一党のマオイストを政権から排除するというのは、コングレス党や統一共産党というよりは、むしろインド政府の政策なのだ。

そもそも、国軍統幕長解任問題で解任拒否のヤダブ大統領（NC)と国軍を支持し、首相であったプラチャンダ議長を辞任に追い込んだのは、インドであった。

また、インドは、懸案となっていたパスポート制作事業に介入し、マオイストからの非難攻撃を受けながらも、この受注に成功した。このとき、カンチプールが、駐ネ・インド大使の受注要求書簡を暴露し、インド批判社説を掲載した。これに対し、インド政府はカンチプールへのインド企業広告を停止させ、さらにカンチプールの新聞用紙を税関で止めてしまった。結局、カンチプールはインド政府の圧力に屈し、インド批判をやめざるをえなかった。

さらにマデシのＲＫ・シャルマ議員がプラチャンダ候補に投票すると、インド大使館は、いわれたとおり投票しないと、おまえの娘をインド系学校から追放するぞ、と脅した。

このように、インドはマオイストの政権参加をあらゆる手段で阻止しようとしているのである。（バブラム・バッタライ副議長なら、認めるかもしれない。）

[4]

もちろん、中国も負けてはいない。中国は、国王からマオイストに乗り換え、ネパールへの影響力を着々と拡大している。中国大使館員や訪ネ使節団がマオイストとさかんに接触しているし、またプラチャンダ議長や人民解放軍幹部の訪中も受け入れた。あるいは、インドがTarai-Madhes Loktantrik Partyを応援すれば、中国はMadhesi Jana Adhikar Forumを支援した。

ＫＢ・マハラのテープ事件もある。プラチャンダ議長を首相に当選させるため、マデシ議員票を50票買収するための資金として５億ルピーを出してくれるよう、中国側に要請したというのだ。真偽は定かではないが、ありそうな話だ。

中国は、亡命チベット政府議会のネパールでの選挙にもあからさまに介入し、投票途中で票ごと投票箱を没収させた。あるいは、ヤダブ大統領のボーダの仏教寺院訪問も、チベット独立派の支援になるとして、やめさせた。このように、中国もインドと張り合い、ネパールへの介入を拡大しているのである。（中国製品、中国企業がネパールを席巻しつつあることはいうまでもない。）

[5]

しかし、ネパールが印中代理戦争にこれ以上巻き込まれたら、ネパールは泥沼の分裂抗争に陥ってしまう。先進国の人権屋さんや民主主義屋さんは怒るだろうが、ここはともかく無原則、無節操でよいから各党が妥協し、安定した国家権力をまず確立し、統治の基礎をつくることが先決だろう。

* Sudha Ramachandra, “India and China hover over Nepal,” *Asia Times*, Oct. 23

谷川昌幸(C)

投稿者: Tanigawa
2010/11/11 14:36

カテゴリー: インド, マオイスト, 国王, 外交, 中国
タグ: プラチャンダ, NC, UML, 内政干渉, 民主化運動, 中国カード, 代理戦争

ロイ： カシミールの不都合な真実

ネパールでは，インド知識人はまったく人気がない。わが崇拝する偉大なガンジーでさえ，その名を出すと，いやな顔をされる。そりゃ糞味噌だよ，ガンジーは偉いだろう，といくらいっても相手にされない。困ったものだ。

ところが，最近，ガンジーの次の次くらいに尊敬するわがロイさんについては，注目するネパール人が出はじめた。ネパール・メディアにも彼女の記事がちょくちょく掲載されている。

このSultan M. Hali「アルンダティ・ロイ：カシミールの不都合な真実」(People’s Review, Oct.10)もその一つだ。筆者のハリ氏は，パキスタンのコラムニストらしいが，それ以上のことは今は分からない。

この記事によれば，アルンダティ・ロイは，「カシミールはインド固有の領土ではない」と発言した。これにインド，とくにBJPが激怒し，ロイを国家反逆罪で告訴しようとしている。(注:結局，告訴しないことになった。あるいは，あまりにも偉すぎて，告訴できなかった。)

ロイによると，インドは独立後すぐ，「植民地主義権力」になってしまった。カシミールはその証拠だ。だから，カシミールのAzadi(自由，解放)は当然だという。そして，このロイの発言を国家反逆罪で処罰しようとするインドは，哀れな，情けない国家である。

「哀れな国家――思いを率直に語ろうとする著作家たちを黙らせなければならないとは。哀れな国家――村人殺害者，大量虐殺者，悪徳企業，不正利得者，強姦犯，貧者の中の貧者を食い物にする者，そういった連中にはふんだんに自由を与えながら，正義を求める人々を投獄しなければならないとは。」

ハリ氏によると，カシミール谷では，支配者はヒンドゥーでも住民の９８％はムスリムだという。もしそうだとすると，現在の世界規準では，カシミール谷の帰属はその住民が決めるべきであり，「カシミールのAzadi」を語ったロイは決して的外れのことをいったわけではない。

しかし，ことは領土にかかわること，尖閣や「北方領土」，あるいはチベットをみても，その難しさ，それに触ることの危険性はすぐ分かる。

インドでも，「カシミールのAzadi」などというと，反逆罪，国賊なのだろう。それなのに，ロイは，カシミールに住む人々の側に立ち，カシミールのことはそこに住む人々が決めるべきだと，ズバッといってしまったのだ。これはたいへん。

ただ，ここでネパールとの関係で注目すべきは，そのようなロイ発言をパキスタン・コラムニストのハリ氏が紹介し，

さらにそれをネパールの「人民評論」が掲載している，という点だ。「人民評論」は王党派であり，そこがパキスタン・コラムニストのロイ記事を掲載する。これは奇妙だ。

ネ印パの三角関係とネパール国内の権力関係，そこにわれらがロイも引き込まれていくのだろうか？ 南アジアには，日本では想像もできないほど複雑怪奇な権力闘争が渦巻き闘われているようだ。

谷川昌幸(C)

投稿者: Tanigawa
2010/11/07 22:30

カテゴリー: インド, 民族
タグ: カシミール, パキスタン, 領土, Roy, 内乱, 反逆, 民族自決

労農党は大統領統治支持

労農党のナラヤンマン・ビジュチェ議長が１１月５日，大統領統治への移行を訴えた。

いまネパール政治はせっぱ詰まっている。マダブクマール・ネパール首相は，なかなかのくせ者だが，予算を人質に取られ，身動きがとれなくなった。なんとか打開をと，ラムチャンドラ・ポウデル氏（NC)を１月ばかり首相に選出し，とりあえず予算を通そう，と提案してみたり，それがだめなら首相を辞め全権を大統領に委ね，大統領の下で予算を通してもらおう，といったりしている。

このネパール首相の提案には，マオイストもUMLも猛反対だが，ここにきて首相に救いの手をさしのべたのが，おなじみビジュチェ労農党議長。彼はかなり前から大統領統治を提案していた。

ビジェチェ議長は，バクタプールの小党の党首だが，支持基盤は安定しており，政治危機になると登場し重要な役割を果たす名士，今回も案外，彼の目指す方向に政治が動き始めるかもしれない。ネパール首相もネパール国家も，いよいよせっぱ詰まってきたのだから。

谷川昌幸(C)

投稿者: Tanigawa
2010/11/06 21:17

カテゴリー: 議会, 政党, 政治
タグ: Bijukchhe, 労農党, 大統領

ガバナンス崩壊: ネパールと日本

ネパールのガバナンス(統治)はアナーキー状態。ここまで来ると喜劇的であり，諸外国もそれを想定して交際しているから，害も少ない。国連にUNMIN派遣を要請したくせに，役立たずだから帰れ，と要求する。あるいは，プラチャンダ議長は，「PLAはせいぜい数千人。UNMINには３万人と吹っ掛け，21,602人を認めさせた。どうだ，スゴイだろう」と暴露し，あっけらかんとしている。とんでもないことなのに，みな，そんなもんだよ，と認めている。ネパール人は，天性のネアカなのだ。

これに対し，日本のガバナンス崩壊はジメジメ惨め。10月29日，警察のマル秘テロ情報が大量にネットに流出したと思ったら，今度は４日，尖閣沖の中国船衝突事件の動画がネットに流出した。ガバナンスぼろぼろ。しかも，その対応が実に陰気。ネパール式，プラチャンダ流に，あっれ，出ちゃった，ゴメンネとやれば，楽しめるが，日本の関係者は沈痛そのもの，陰気くさくてたまらん。これでは，事態はますます悪化するばかりだ。

日本の没落については，すでに何回も指摘した。このガバナンス崩壊もその一つだが，ここでもう一つ注目すべきは，日本のHDI（人間開発指数）の下落——

▼HDI(2005年)：日本＝11位

ついに日本はここまで落ちぶれた。5年後の現在はもっと下落しているだろう。しかし，どうせ落ちるなら，楽しくやろう。情報じゃじゃ漏れ，日本に機密なし。大いに結構。HDI世界11位。それがどうした。清貧こそ日本の伝統だ。それがイヤなら，「長屋の花見」でも楽しもうではないか。

谷川昌幸(C)

投稿者: Tanigawa
2010/11/05 20:28

カテゴリー: 情報 IT, 政治
タグ: ガバナンス, テロ, 尖閣, 情報, 機密

首相選挙，16回目も失敗: 大統領委任統治へ？

11月4日，16回目の首相選挙が行われたが，唯一の立候補者，われらがポウデル氏(コングレス党)は過半数にはるかに及ばず，またしても選出されなかった。次回は，ティハール後

の11月17日。

■ポウデル候補：賛成８２，反対２，白票１７。出席１０１，制憲議会定員６０１。

大統領統治の提案：ネパール首相

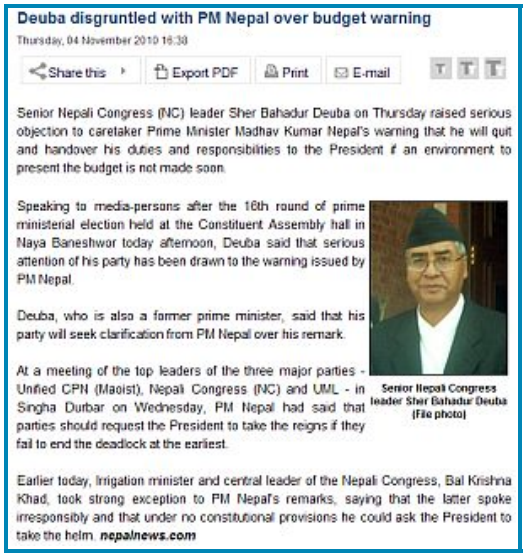
この16回目の首相選挙失敗を受け，マダブクマール・ネパール首相が，爆弾発言をした。eKantipur(Nov4)によれば，もしマオイストやUMLがポウデル候補を支持しないなら，国家統治権を大統領に委ねる，といったという。Nepalnews.com(Nov4)では，もし予算が通らなければ，統治権を大統領に引き渡し辞任する，といったそうだ。いずれにせよ，これはネパール首相の脅しであり，このままではそうなる可能性が高い。

そもそも制憲議会は回を追うごとに出席者が減少し，今回はわずか101人，全議員の１７％にしかすぎない。定足数の規定はないのだろうか？ こんな数字では，制憲議会は正統性をほぼ失ってしまっている。

この状況では，ネパール首相が言うように，大統領統治に移行した方がよい。私は以前から大統領委任独裁の必要性を強調してきた。現在のネパールには，先進諸国御用学者好みの民主主義は，百害あって一利なし。やめた方がよい。

制憲議会は，首相に先を越される前に，民主主義を一時棚上げし，大統領への独裁権限の委任を決議すべきだ。人民のための大統領委任独裁である。

老獪ネパール首相か大統領委任独裁か
首相権限カットの思い違い
大統領統治へ



Deuba disgruntled with PM Nepal over budget warning

Thursday, 04 November 2010 16:38

Share this　Export PDF　Print　E-mail

Senior Nepali Congress (NC) leader Sher Bahadur Deuba on Thursday raised serious objection to caretaker Prime Minister Madhav Kumar Nepal's warning that he will quit and handover his duties and responsibilities to the President if an environment to present the budget is not made soon.

Speaking to media-persons after the 16th round of prime ministerial election held at the Constituent Assembly hall in Naya Baneshwor today afternoon, Deuba said that serious attention of his party has been drawn to the warning issued by PM Nepal.

Senior Nepali Congress leader Sher Bahadur Deuba (File photo)

Deuba, who is also a former prime minister, said that his party will seek clarification from PM Nepal over his remark.

At a meeting of the top leaders of the three major parties - Unified CPN (Maoist), Nepali Congress (NC) and UML - in Singha Durbar on Wednesday, PM Nepal had said that parties should request the President to take the reigns if they fail to end the deadlock at the earliest.

Earlier today, Irrigation minister and central leader of the Nepali Congress, Bal Krishna Khad, took strong exception to PM Nepal's remarks, saying that the latter spoke irresponsibly and that under no constitutional provisions he could ask the President to take the helm. nepalnews.com

ネパール首相の大統領統治発言を批判するデウバ氏 ／ その横の米政府民主主義宣伝(nepalnews.com, Nov4)

谷川昌幸(C)

投稿者: Tanigawa
2010/11/04 22:19

カテゴリー: 議会, 憲法, 民主主義
タグ: ネパール首相, ポウデル, 大統領, 委任独裁, 正統性

枯松神社： 神仏共生はなお可能か？

［1］

「文化の日」の11月3日，憲法第20条「信教の自由」を思いつつ，黒崎の枯松神社祭に参列した。この神社には，キリシタン宣教師のサンジワン(聖ジワン）が神として祭られており，秋の祭では「カクレ（旧）キリシタン」，カトリック教会，仏教の３宗教が合同して祭礼を行う。神道は直接は参加していないが，枯松神社はれっきとした神社だから，その神域内の神社での祭礼には古来の日本の神も当然参加していると見るべきであろう。つまり，枯松神社祭は，カクレキリシタンの神，カトリックの神，仏教の仏，日本神道の神を合同して祭る，おそらく世界唯一の特異なお祭りなのである。（カクレキリシタンは「旧キリシタン」」「潜伏キリシタン」「隠れキリシタン」などとも呼ばれる。）

この祭には，キリシタン弾圧への深い反省がある。幕府は，禁教令によりキリシタンを徹底的に弾圧した。その結果，キリシタンは根絶されてしまったと思われていたが，当時は不便な僻地であった黒崎付近にはキリシタンが潜伏し，密

かにキリシタン信仰を守り続けていた。そのとき，この地方のいくつかの寺，たとえば樫山の天福時はキリシタンと知りつつも彼らを受け入れ，弾圧から守り続けた。

また，神社も，サンジワンを御神体として祭らせることによって，結果的にキリシタンの信仰を守った。もちろん，神社はカクレキリシタンの隠れ蓑として利用されただけかもしれないが，それでも鎮守の森の神は利用されることを許したのだから，キリシタンを守ったといってよいであろう。

枯松神社祭は，キリシタン弾圧への深い反省と，諸宗教の相互理解・共存を促進するため，開催されているのである。

●プログラム(2010.11.3)
感謝祭・慰霊ミサ 小島師（カトリック長崎大司教区）
オラショ奉納 村上師(旧キリシタン代表)
講 演 野下師(カトリック中町教会)
▼参考
侵略と弾圧から共生へ：長崎キリシタン神社

［2」

この枯松神社祭には，2007年11月にも参加した。そのときは，曇天ということもあったかもしれないが，神社境内は，キリシタン弾圧時代をしのばせるような，鬼気迫る雰囲気に包まれていた。その厳粛さには誰しも粛然たらざるをえないほどであった。

ところが，今日は，そのような霊気のようなものは，ほとんど感じられなかった。晴天ということもあろうが，どうもそれだけではなさそうである。

一つは，この３年で，神社周辺が整備され「近代化」されたこと。立派な道路ができ，神社近くのグラウンド・駐車場も完成していた。観光バスも来ていた。「近代化」は暗闇を「光で照らすことであり，「魔術からの解放」である。カクレキリシタンの神を隠す神域が，光に照らされ，神は隠れることも魔術を使うことも難しくなった。これが一つ。

もう一つは，それと関連するが，傍若無人のカメラ中高年。最近は，中高年男女の間で写真が流行っているらしく，バカでかい一眼レフをもったアマチュア中高年男女が，ところかまわず動き回り，ミサ中にもかかわらず，パシャパシャ写真を撮りまくる。神父様がアーメンといえば，思い切り接近し，すかさずパシャパシャ。昔，写真は魂を抜くと恐れられた。いかな全能の神といえども，こんな自己中素人写真屋にパシャパシャやられては，子羊を救う前に退散してしまうのは当たり前だ。こんな罰当たりの写真屋どもは，来年から入域禁止とすべきだ。

［3］

しかし，これは実際には難しい。地域の人々は，この世界的にも珍しい枯松神社祭を村おこしに利用しようとしている。観光化だ。観光化すれば，神は見せ物となり，逃げ出す。神は隠れてあることをもって本質とするからだ。あとには，外見と私利のみのマモン神が控えている。

［4］

それと，今年不思議だったのは，お寺さんの参加がなく，祭礼は仏教抜きで行われたこと。また本来祭の中心のはずのカクレキリシタンも，オラショ奉納はあったものの，祭礼での扱いは小さく，影が薄かった。今年の祭礼は，カトリック教会が全体をほぼ仕切っており，カトリックのミサといってよいくらいであった。(主催は「枯松神社祭実行委員会)

もともとカトリックは，その名の通り普遍的であり，非常に柔軟だ。布教に役立つと思えば，土地の慣習であれ神々であれ，何でも取り込んでしまう。プロテスタントなど，足元にも及ばない。しかし，もし枯松神社祭がカトリック布教に傾斜していくなら，その本来の意義を失ってしまうだろう。

とはいえ，カクレキリシタンの人々は高齢化し，先祖伝来の信仰の継承が難しくなっているし，世は隠すことをもって悪とし，何でもかんでもあからさまに平気で見せてしまうようになった。地域の人々の生活の改善も当然必要だ。

それやこれやで，枯松神社祭の秘教的厳粛さは，結局，失われざるをえないだろう。残念なことだが。

黒崎教会（枯松神社側より）

神社でのミサ

祭神サンジワン様

聖体拝領

オラショ奉納

講演

(C)谷川昌幸

投稿者: Tanigawa
2010/11/03 20:48

カテゴリー: 社会, 宗教, 文化
タグ: オラショ, カトリック, キリシタン, 神, 近代化, 天福時, 枯松神社

WordPressブログを使用してみて

ブログをWordpressに移転して半月ほどたった。この間忙しくて，表示画面はほぼ既成サンプル通り。

このWordpressブログは，前のWindows Liveよりも多機能で，情報量も多い。アクセス数，リンク元，検索語，アクセス記事など，便利なツールが無料で利用できる。

その反面，パソコンの素人には，難しいことも多い。たとえば，最大の問題は，表示文字が大きくならないこと。部分的には大きくできるが，ページ全体を大きくする方法が分からない。あるいは，記事のパーマネントアドレスの取得方法も不明。基本的には中級者以上の英語仕様なのだ。

いまのところ文字が小さくて読みにくいでしょうが，あとしばらくブラウザの側で拡大し，ご覧下さい。そのうち，おいおい学習し，読みやすくしていきます。

谷川昌幸(C)

投稿者: Tanigawa 2010/11/02 19:22	カテゴリー: 情報 IT タグ: タグ, ブログ, HTML

首相選挙，１５回目も失敗

１１月１日，１５回目の首相選挙が実施されたが，立候補者はわれらがポウデル氏のみ。

■ラムチャンドラ・ポウデル（NC)： 賛成９６，反対２，白票１２９。出席１２９。制憲議会定員６０１。

回を追うごとに出席議員は減少し，今回はわずか１２９人。全議員の１／５しか出席していない。だんだんコングレス党大会のようになってきた。次は，１１月４日，つまり３日後。毎日首相選目前だ。

ここが頑張りどころだ。制憲議会(立法議会)が正統性を失い解散となるか，それとも何らかの妥協がなり，新首相の選出となるか？

UNMIN残存期間，新憲法制定のスケジュールを考えると，もし首相が選出できないと，これまでの平和構築プロセスが全部パァになってしまう。さぁ，どうするか？

(C)谷川昌幸

投稿者: Tanigawa 2010/11/01 21:31	カテゴリー: 議会, 政党, 政治 タグ: コングレス, 制憲議会, 正統性